

しかるべき

- ⑦法皇は仙洞をいでて天台山に、主上は鳳闕をさて西海へ、攝政殿は吉野の奥とかや。女院、宮々は八幡、賀茂、嵯峨、うづまさ、西山、東山のかたほとりにつゐて、にげかくれさせ給へり
- ⑧我朝には、まづ天武天皇いまだ東宮の御時、大伴の皇子には、からせ給ひて、鬢髪をそり、芳野の奥にしのばせ給ひたりしかども、大伴の皇子をほろぼして、つゐには位につかせ給ひき。
- ⑨主上わたらせ給へども、節會もおこなはれず、四方拝もなし。鱈も奏せず。吉野のくずもまいらせず。
- ⑩吉野、泊瀬の花をば歌人がしり、敵のこもたる城のうしろの案内をば、かうのものがしる候

- ⑪判官頸どもきりかけて、戦神にまつり、門出よしと悦で、だいもつの浦より船にのて下られけるが、折節西のかぜはげしくふき、住吉の浦にうちあげられて、吉野のおくにぞこもりける吉野法師にせめられて、奈良へおつ。

(注) 番号は二の通し番号によつた。

以上がその全用例であるが、南都本に比べて二例多いにすぎない。南都本との増減という点では、巻四の増と⑥の減があげられる。これによつて、(イ)天武天皇との吉野、(ロ)吉野法師の吉野の二項が増えたことが注目される。⑧の重出がある(延慶本・源平盛衰記・長門本も)ように、吉野にとつて天武天皇の故事は忘れることのできなものであつたが、当道系本は特にそれを重くみたものではなかつた

ろうか。又、(ロ)については、吉野法師が歴史の舞台に登場してくる、それとの関りがあるかとも考えるが、詳にし得ない。一方、⑥の減は、覚一本の記事の成立事情を暗示するものであらう。⑦の文章があることによつて、覚一本が非当道系本のようなものを前提にしていることは間違いない。

覚一本の表現と非当道系本のそれとの近似をみるに

- ①「吉野」に言及する点で、南都本・源平盛衰記と近い
- ②(乙イ)延慶本はやはり異種である
- ③源平闘諍録・延慶本に近い
- ⑤「諸国七道悉」「いづれの浦か」等の言葉がある点で、四部合戦状本・長門本に近い

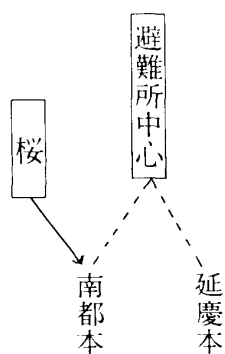
- ⑦女院・宮々についての表現などで、延慶本に近い
- ⑧不明

- ⑩「泊瀬」をあげる点で、南都本・源平盛衰記と近い
- ⑪「吉野のおく」「吉野法師」に触れる点で、南都本・延慶本(その後半部)に近い

のごとくである。これらのうち、①⑩が注目される。桜の吉野に関する部分が南都本・源平盛衰記に近いということは、南都本に影響されたとみることはできないであらうか。南都本の風雅な趣向が、平家物語編著者の関心をひき、その筆を動かせた一時期を筆者は想像するのである。

(イ)避難所としての吉野の項は延慶本が南都本に一致する(但し、①の問題がある)。(ロ)桜の吉野の項は、諸本不足しているし、延慶本、長門本は一箇所のみである。(ニ)天武天皇との吉野の項は長門本が一致する(延慶本には②(乙)の問題がある)。

右の調査によれば、南都本は桜の吉野を多く記しているところにその特徴があるかと思われる。とすれば、問題の「吉野ノ奥へソ籠ラセ給ケル」の新機軸は、延慶本、南都本周辺の従来の吉野のイメージ(避難所)によって、史実を踏み出した(虚構か異説の採用かは詳にし得ない)類であったということになるうか。



四

筆者は以上の考察において、南都本の該当部のみを比較してきた。しかし、これは、本来は、諸本の全用例をもとにして考察されるべきものであろう。筆者がこれをとらなかったのは、南都本に欠巻があり、その全体がつかめないからである。

最後に、本考察で、今まで触れなかった当道系本について、覚一本における吉野の全用例を挙げて、いささか、その欠を補っておきたい。

①抑此成範卿を櫻町の中納言と申ける事は、すぐれて心數奇給へる人にて、つねは吉野山をこひ、町に櫻をうへならべ、其内に屋を立てすみ給しかば、来る年の春毎にみる人櫻町とぞ申ける(イ)昔清見原の天皇のいまだ東宮の御時、賊徒におそはれさせ給ひて、吉野山へいらせ給ひけるにこそ、をとめのすがたをばからせ給ひけるなれ。(巻四)

⑧我等の本願天武天皇は、いまだ東宮の御時、大友の皇子にはばからせ給ひて、よし野のおくをいでさせ給ひ、大和國宇多郡をすぎさせ給ひけるには、其勢はつかに十七騎、されども伊賀伊勢にうちこへ、美濃尾張の勢をもて、大友の皇子をほろぼして、つるに位につかせ給ひき(巻四)

⑩目にかけたるかたきをうたずして、南都へいれまいらせ候なば、吉野、とつかはの勢ども馳集て、いよいよ御大事でこそ候はんずらめ(巻四)

②五節はこれ清御原のそのかみ、吉野の宮にして、月しろく嵐はげしかりし夜、御心をすましつ、琴をひき給ひしに、神女あまくだり、五たび袖をひるがへす

③行歩にかなへる物は、吉野十津河の方へ落ゆく

④物の音もふきならさず、舞樂も奏せず、吉野のくずもまいらず

⑤帝都名利地、鶏鳴て安き事なし。おさまれる世だにもかくの如し。況や乱たる世にをいてをや。吉野山の奥のおくへも入なばやとはおぼしけれ共、諸國七道悉そむきぬ。いづれの浦かおだ

テ京へ送ケリサテ判官ヲハ吉野法師押寄テ打ムトシケルヲ左
藤四郎兵衛忠信ト申者戦ヒテ判官ヲハ

(ハ)源平盛衰記・長門本(延慶本の「不見ケル」までと、長門
本を校異で示す。)

都よりあひくしたりける女房たちもこ、かしこに^{①②③}すてられ^{④⑤⑥⑦}
てはまのいさこをふみ濱松の木の本に袖をかたしき^{⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑}てなき
ふしたりけるをそのあたりの人あはれひて都のかたへ送り^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑}
けり白拍子二人磯のせんしはかりそ義経に付て見えざりけ^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑}り

校異 ①「義経も行家もゆくかたをしらす」アリ(長)

②「京より」(延)、ナシ(長) ③ナシ(延)、とり

(長) ④共も(延)、共は(長) ⑤ナシ(延・長)

⑥「皆」アリ(延) ⑦捨置たりければ(延・長)

⑧砂の上(延)、まさこのうへ(長) ⑨松の下(延)、

松のもと(長)、 ⑩「袴ふみしたきて」アリ(延・

長(はかまを) ⑪ければ(長) ⑫者共(延・長)

⑬「のかた」ナシ(延・長) ⑭「そ」アリ(延)

⑮る(延) ⑯「其中にいか、したりけむ」アリ

(延) ⑰磯の禪師か娘に閑と云白拍子(延)、白拍

子しつか(長) ⑱判官(延・長) ⑲た(長)

⑳る(延・長)

延慶本には「閑」だけを「大物ノ濱」でうち捨てなかったとい

南都本『平家物語』における吉野

う文が重出している。(ハ)に校合したように、その前半部は、小異
はあるが、諸本にほぼ通じる(四部合戦状本・南都本を含めて)。
従つて、延慶本は義経の吉野潜伏の次第を詳記する特徴のあるこ
とが指摘される。

諸本のうち、四部合戦状本、長門本は吉野に言及しない(源平
盛衰記は後に「金峯にのほり」の語句がある)。ただし、延慶本も
後半部にその言及があり、源平盛衰記も注記のとおりであるとす
れば、もともとはここで吉野にふれることはなかったのかもしれ
ない(「不知其行方」以上の言及はなかったか)。もし、この仮定
がなりたつならば、「吉野ノ奥へ籠給フ」と吉野法師の反応を記
した南都本は新機軸を出したことになるわけであり、延慶本後半
部と浅からぬ関りがあつたはずである。猶お、延慶本後半部には
雪の吉野がある。

以上をまとめると、次のようになる。

諸本	項目				
		四部合戦状本	延慶本	源平盛衰記	長門本
	避難所	③⑤	③⑤⑧⑪	③⑪	②乙③⑤⑧
	桜	①⑩	⑩	①⑩	⑩
	天武	②甲	②甲⑧	②甲②乙	②甲②乙⑧
	その他		⑪(雪)		

張 ⑦⑧ナシ

(ハ)源平盛衰記

我朝にハ天武天皇ハ大友皇子の難をおそれて春宮の位を退き
ましまして大仏殿の南西にして御出家有しかとも終に大友皇
子を討て位につき給き

源平盛衰記の記事が簡略であるが、諸本に大きな違いはないと
考えられる。ここも源平盛衰記だけが吉野に言及しない。

⑩(イ)源平闘諍録

籠タル敵ノ山ノ案内ヲハ剛ノ者コソ知候ヘ

(ロ)四部合戦状本

吉野籠田花ヤ紅葉透仁知候草木繁キ山ナレ鹿臥所射手知ル

(ハ)延慶本・長門本（長門本を校異で示す。）

①紫塵ノ嫩蕨人拳^レ手ヲ碧玉寒蘆錐脱囊^ヲトイヘリ心スキタル歌人
②ノ吉野龍田ニワケ入テ花ヤ紅葉ヲ尋ヌルニ花ハ峯ノコスヘ^④面
白ク紅葉ハ谷川ノ岸ノ岩根^⑤色深シ^⑥

校異 ①②③ナシ ④⑤「に」アリ ⑥「されとも其里人

しらねとも透人杜しれ」アリ

(ニ)源平盛衰記

鹿つく山をはれうしり鳥つく原をはたかしやうしり魚つく
浦をハ網人しりちゑある人をハちしやそしるよし野はつせの
花の色すまやあかしの月の影はそのさと人もしらすともすき
たる人こそしるならひなれ

諸本で少しずつ異なり、延慶本・長門本の関係以外は詳にし得
ない。猶お、源平闘諍録だけが吉野に言及しない。

⑪(イ)四部合戦状本

自京相具^シ下タル女房達思々上リヌ京ヘ義經行家不知其行方女房白
拍子師通賀計^ソ付テハ判官不見殘

(ロ)延慶本

京ヨリ具シタリケル女房共モ皆捨置タリケレハ砂ノ上松ノ下
ニ袖ヲ片敷袴フミシタキテ泣臥タリケルヲ其邊ノ者共憐テ都
ヘソ送りケル其中ニイカ、シタリケム磯ノ禪師カ娘ニ閑ト云
白拍子ハカリソ判官ニ付テ不^レ見ケル義經ハ僅ニ三十餘騎ノ
勢ニテ吉野山ニ籠ニケリ彼山大雪ノ中ナレハオホロケニハ人
カヨフヘクモナシ京ヨリ相クシタリシ女房共モ皆大物ノ濱ニ
テ捨置ツ磯ノ禪師カ娘ニ閑ト云シ計ソクシタリケル彼大雪ノ
中ヘ行ヘキヤウナカリケレハ判官閑ニ宣ケルハイツクヘモク
シ奉リタケレトモカ、ル雪ノ中ナレハ女房ノ身ニテハ叶マシ
我身モ通ルヘシトモ覺ヘネハ自害ヲセムスルナリ此ヨリトク
トク都ヘ行ヘシト宣ケレハ閑泣々申ケルハイカニ成給ハム所
マテモ我命ノアラムカキリハクシ給ヘステラレ奉テ堪忍ヘシ
トモ覺ヘストテ泣ケレハ誰モサコソハ思ヘトモカ、ル大雪ナ
リ不力及^ニ命アラハ尋給ヘ我モ尋ムトテ金銀ノタクヒトラセ
テ郎等ニクセサセテ送ニケリ郎等此寶ヲトラムトテ打捨テ失
ニケレハ吉野ノ藏王堂ヘタトリ参タリケルヲ吉野ノ法師哀ミ

校異 ①「みのちからもあり」アリ（長） ②かなへる

（延・長） ③おちうせぬ（延・長）

（ロ）四部合戦状本・源平盛衰記（源平盛衰記を校異で示す。）

①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

校異 ①「わかくさかりにして」アリ ②ナシ ③の

④ともから ⑤こもり ⑥⑦ナシ

「有力」「山林ににけ」の有無はあるが、大きな違いはない。

この項は全て吉野に言及している。

⑤（イ）四部合戦状本

帝都明利地ニハ鶏鳴無安事納世尚如斯況於テヲヤ乱時入 貧

吉野山奥ヲ思ヘ諸国七道悉乱レ騒ク上ヘ何レ浦可穩便ナル

（ロ）延慶本・長門本（長門本を校異で示す。）

大方 帝都 名利ナレハ地鶏鳴キ無安思ト 云ヘリ治マレル世

タニモナヲ如此イワムヤ乱タル時ハ理リ也吉野山ノ奥マ

テモ 一天四海ノ乱レナレハ深山遠キ國モ不穩カナラ

校異 ①②「は」アリ ③ナシ ④「そ」アリ ⑤みたれ

⑥「のおく」アリ ⑦「入まほしくはおもへ共諸

国七道」アリ ⑧遠国 ⑨いつくの浦かおたしかる

へし

（ハ）源平盛衰記

帝都は名利の地鶏鳴て無ニ安思といへは治れる代すらな

をかくのこしいはんやみたれたる時なれハ理也一天四

南都本『平家物語』における吉野

海のさはき東は坂東八ヶ國西ハ鎮西五ヶ國北陸南海畿内
邊土までしつかならず

長門本は延慶本と四部合戦状本の表現が混合している（校
異の⑦⑧は四部合戦状本の表現に近い）。諸本で大きな違い

はないが、源平盛衰記だけは吉野に言及しない（直後に「ふ

かき山のおく」という語句はある）。猶お、南都本の「憂世

ノ外ノ櫻ヲモ求ムヘキ」のように桜に言及するものは見出せ

ない。

⑧（イ）源平闘諍録

天武天皇東宮にて可にて受ニ天智の御譲を天智の御子大友の王子

諍ニ位を可奉討ニ東宮を之由聞は東宮称ニ御惱と雖ニ辞申給

ニ御門猶誣申給者東宮於仏殿南面剃落御髪を入ニ吉野山ニ給発

伊賀伊勢尾張三箇国ノ兵ヲ討大友王子東宮即位に

（ロ）延慶本・長門本（長門本を校異で示す。）

天武天皇ハ春宮ニテ御坐シカ天智天皇御譲受サセ給ヘキニ

テ有ケルニ位ニ付給ハ大伴王子打奉ラント云事ヲ聞給テ御虚

病ヲ構ヘサセ給テ遁申サセ給ケルヲ帝強ニ姪申サセ給ケレハ

⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿

佛殿ノ南面ニシテ鬘ヒケヲ剃セ給テ吉野山ヘ入セ給タリケ

ルカ伊賀伊勢美乃三ヶ國ノ兵ヲ發給テ大伴皇子ヲ討奉リテ位

ニ即給ニケリ

校異 ①「の」アリ ②「を」アリ ③大伴の皇子の位に
即給は、奉討給は ④註 ⑤「大」アリ ⑥尾

此ヲ五節ト名付タリ^②

校異 ①「むかし」アリ ②帝^{ミカド} ③御宇に ④五進^{ミツマセ}

⑤事 ⑥「とをく」アリ ⑦豊^{トヨ} 明^{イミ} ⑧天武天皇

よし野河に御幸して御心をすまし琴をひかせ給ひしに神女空より降下り ⑨袖 ⑩ひるかへしけれ

とも ⑪ナシ ⑫天くらく ⑬ナシ ⑭けれ

⑮ナシ ⑯「され」アリ ⑰仙女 ⑱に耀て

⑲「乙女子かをとめさひすもから玉を乙女さひすもそのから玉を 五聲うたひ給つ、五度袖を繰す」

アリ ⑳ナシ ㉑女 ㉒ナシ ㉓さてこそ ㉔ナ

シ ㉕たれ

(ロ)長門本 (甲)(ロ)延慶本と一致する部分に傍線を引いた。

五節の宴酔と申はむかし清見原の天皇の御時よりはしまれり。清見原のてんわうと申は天智天わうの御事なり。御門ゆつりをうけさせ給へきにてましましけるに、大伴皇子のなんをおそれて、かみを剪て出家と名つけて吉野の奥に籠らせ給けり。清見原と申所に住せ給けるに、その所をつかせ給う。心を澄せ給ひ、吉野河の水上にして琴をひかせ給ひしに、神女天よりあまくなり、おとめ子かおとめさひすもからたまのをとめさひすもそのからたまを 五^ソこゑうたひ五度袖をひるかへす。これを五節の始なる

延慶本・源平盛衰記・長門本では五節の起源が重出している。

このうち、延慶本・源平盛衰記では(甲)(乙)で内容を異にしているが、長門本はほぼそれが一致している。考えてみると、重出しているとはいっても、延慶本・源平盛衰記のように前後で異なるのは奇妙なことである。延慶本の場合、巻第一本は特異だが(源平盛衰記については後述する)、巻第二本は諸本に通じる内容である(長門本(甲乙とも)、南都本もかなり近い。)この具合は、どこか得長壽院造進に対する忠盛への勸賞の備前国——但馬国の重出のそれに似ている(勿論、史実への配慮、源平盛衰記の対応など異なる要素はある。)しかし、重出の問題は只今のところ詳にし得ない。源平盛衰記の場合、(乙)(イ)は明らかに、延慶本の巻第一本のもの(甲)(ハ)からなっている。因みに、(乙)(イ)の校異で(甲)(ハ)に一致するものは①、⑧(一部異なる)、⑱で、言い換えてない部分の全てと言ってよい。(甲)(乙)で一致している長門本の場合、(乙)(ロ)は延慶本の(甲)(ロ)に近いことが指摘できる。先の、忠盛への勸賞にかかわられれば、重出しながらもほぼ一致しているということは、勸賞の重出がなかった手際と関係ないのであろうか。(甲)は諸本に大差がないので、②については、これと(乙)(イ)の二話があったことになる。このうち(乙)(イ)延慶本だけが吉野に言及しないのは注目される。

③(イ)源平闘諍録・延慶本・長門本(延慶本・長門本を校異で示す)。

①② 叶フ行歩ニ輩ハ落^③失ス吉野戸津河ノ方ヘ——源平闘諍録

ナキヲ歎テ花ノ祈リノ為ニトテ日ニ三度必ス泰山府君ヲ祭り
ケリサテコソ七日ニチルナラヒナレトモ此櫻ハ三七日マテ梢
ニ残りアリケレ西南ノ惣門ノ見入ヨリ櫻見エケレハ異名ニ櫻
町中納言トソ申ケル

(ハ)源平盛衰記

櫻町の中納言と申事ハ優に情ふかき人にて吉野山を思ひ出て
さくらを愛し給けり無漏^{ムロ}の屋嶋よりかへり上て後町の四方に
吉野の櫻をうつしうへ其中に屋をたて、栖給ひけれハ見る人
此町をハ樋口町櫻町と申けり

(ニ)長門本

重範卿を櫻町と申ける事は、彼卿櫻をことにあひし給て、姉
小路むろまちの宿所に惣門の見入より、西東の町かけて並櫻
をうゑとをされたりければ春の朝をこち人異名にこの町をは
櫻町とそ申ける

町に桜を植えたこと、それで、人々が桜町と呼んだことは共通
するが、表現は互に異なる。このうち吉野に言及するのは源平盛
衰記（「吉野山を思ひ出て」町の四方に吉野の桜をうつしうへ）
だけである。

②(甲)南都本と同位置

(イ)四部合戦状本

昔清見原の帝吉野河の宮にて澄して御心を弾下^レシに琴を神女自より天
々ま下り五度と鰺袖を是ソ五節の始なる

南都本『平家物語』における吉野

(ロ)延慶本・長門本（長門本を校異で示す。）

五節ト申ハ昔清見原ノ御門吉野^①宮ニテ御心ヲスマシテ^②琴
ヲ彈セ給シカハ神女天ヨリ天降^④テ ヲトメコカヲトメサヒ
スモ唐玉ヲヲトメサヒスモ其ノ唐玉ヲ ト五聲ヲ^⑤嫗^{ウタイ}給テ
五度袖ヲ鰺ス是ヲ五節ノ初トス

校異 ①「の」アリ ②「かうりと申樂を」アリ ③に

たんし ④⑤ナシ ⑥廻雪の

(ハ)源平盛衰記

抑五節と申ハ昔清見原天皇のそのかみ吉野の河に幸^{ミユキ}して
御心をすまし琴をひかせ給しに神女二人もあまくたり お
とめ子か乙女さひすもから玉をおとめさひすもそのから玉
を と五こゑうたひ給つ、五度袖をひるかへす是を五節の
始なる

(乙)「忠盛朝臣昇殿事」（卷一）中

(イ)延慶本・源平盛衰記（源平盛衰記を校異で示す。）

抑五節ト申ハ^①清見原ノ天皇ノ御時唐土ノ御門ヨリ崑崙山
ノ玉ヲ五ツ進サセ給ヘリ其玉暗ヲ照スナリ一玉ノ光^⑥五十
兩ノ車ニ至ル是ヲ豊ノ明リト名付タリ御秘藏ノ玉ニテ人是
ヲ見事ナシ其比又唐土ノ商山ヨリ仙女五人來テ清御原ノ庭
ニテ廻雪ノ袂ヲ^⑨鰺事^⑩五度アリ但暗天ニシテ其形ミエサリシ
カハ彼五玉ヲ出^⑪テ廻雪ノ形ヲ御覽シキ玉ノ光アキラカニ
シテ晝ヨリモ猶明シ^⑬而ニ五人ノ仙人ノ舞事各異節也故ニ^⑭

(ハ)吉野法師の吉野

- ⑪「吉野法師共關東へノ聞へノタメニトテ追出奉へキ」(巻十)
二) 猶お、③「大衆若クサカンナルハ吉野戸津河ニ逃籠リ
山林ニ交ケリ」(巻六)、⑧「御殿ノ南面ニシテ鬢髪ヲ剃オ
ロシ吉野ノ山へ入セ給フ」(巻九)もいくらかこれに関るも
のか。

(ニ)天武天皇との吉野

- ②抑五節ト申スハ昔清見原ノ天皇吉野ノ宮ニテ御心ヲスマ□セ
給ツ、琴ヲ引セ給ケルニ神女アマクタリテ
オトメコカヲトメサヒスモカタマヲオトメサヒスモソノ
カタマヲト
五聲ウタイテ五度ヒ袖ヲヒルカヘス(巻六)
外に ⑧「御殿ノ南面ニシテ鬢髪ヲ剃オロシ吉野ノ山へ入セ給
フ」(巻九)

(ホ)国栖の吉野

- ④治承五年正月一日アラタマノ年立カハリケレトモ内裏ニハ東
國ノ兵革南都ノ火災ニ依テ朝拜留メラル主上出御ナシ物ノ音
モ吹鳴サス舞樂モ奏セス吉野ノ國栖モ参ラス(巻七)
外に ⑨(巻十)(初出だが、本論との関りがないので引用し
ない)

(注) ①～⑪は始めからの通し番号である。

(イ)避難所としての吉野と(ロ)桜の吉野が比較的多いことが注目され

る。(イ)では「奥」(四例)「山へ入」「山林ニ交」(各一例)と、各
に現世の風の及ばない所へと志す旨を示す語句があり、南都本で吉
野が避難所として最も多く使われていることは間違いない。こ
のうち、巻八では⑤⑥⑦と連続するのであるが、このことに意味は
ないのであろうか。⑤によれば、吉野山は「深キ山」であり、「名
利ノサカヒ」である「帝都」とは対照的な場所とされるのである
(又ここでは「憂世ノ外ノ櫻」と(ロ)と(イ)が結びつけられているとい
う特徴もある)。

三

次に、非当道系諸本に比べて、南都本の右の傾向がどのような
位置をしめるのか、(イ)(ロ)の各箇所について比較してみたい(ニ)を
加えたのは、或は(イ)と関係があるかもしれないと考えたからであ
る)。

①(イ)四部合戦状本

櫻町の中納言成憲と申す歌人にて町植て櫻を其中に立て屋を住下ケレは
来たる年毎に春花盛^ラ比^ハ見ル人呼て之^ヲを櫻町と申す

(ロ)延慶本

此重範卿ヲ櫻町中納言ト云ケル事ハ此人心スキ給ヘル人ニテ
東山ノ山庄ノ町々ナリケルニ西南ハ町ニ櫻ヲ殖トヲサレタリ
北ニハ菰^{モミ}ヲ殖ヘ東ニハ柳ヲ殖ラレタリケル其中ニ屋ヲ立テ住
給ケリ來レル年ノ春毎ニ花ヲ詠シテサク事ノ遅ク散ル事ノ程

(注 これは記事の類似の概図である。)

とすれば、南都本における(1)(2)の言い回しのずれは、右図の × の規制と南都本編著者の意図の衝突として理解するべきではないだろうか。諸本に对照して気付くことであるが、(1)の「吉野ノ奥ヘソ籠ラセ給ヒケル」としたところに編著者の新機軸があるのである。そこで、この新機軸を産んだものを探るべく南都本において、吉野がどのように描かれていくか、次に考察してみよう。

二

南都本における吉野関係の記事を分類して示すと次のようになる。
(猶お、全部でも十一例を数えるのみである。)

(イ)避難所としての吉野

③大衆若クサカンナルハ吉野。戸津河ニ逃籠リ山林ニ交ケリ

(巻六)

⑤帝都名利ノサカヒ鶏鳴テ安キ事ナシト云リ治レル世ニタニモ

猶カクコソ有ケレマシテ乱レタル時ハ理ナリ吉野。山ノ奥ノ奥

マテモ憂世ノ外ノ櫻ヲモ求ムヘキニ坂東陸奥四國九國マテモ

閑ナラスト聞ユ一天四海ノ乱レハ深キ山遠キ國マテモ閑ナラ

・ス(巻八)

⑥都ニテ猶惡カルヘシトテ高則ヲ知ヘニテ吉野ノ奥ヘソ籠ラセ

給ヒケル(同)

⑦攝政殿モ吉野ノ奥トカヤ聞ユ(同)

南都本『平家物語』における吉野

⑧昔天武天皇ハ東宮ニテ御座セシカハ天智天皇ノ御譲リヲ請サセ給フヘカリシニ大友ノ皇子諍ヒ申サレシ間天武ハ御病ト稱シテ辞シ申サセ給ヒケルヲ御門頻ニシ申サセ給ヒケレハ御殿ノ南面ニシテ鬢髪ヲ剃オロシ吉野ノ山ヘ入セ給フトキコヘシカ其後伊賀伊勢尾張三箇國ノ兵ヲ催シ美濃國風破ノ關ニシテ大友ノ皇子ニ討チ勝タセ給再ヒ都ニ歸入テ終ニ位ニ付給ヒタリケリ(巻九)

⑪關東ヘ志アル兵トモ襲來由聞ヘケレハ今ハ如何ニ思共叶マシトテ自^レ城引具タル女房達アマタヲハシケル平大納言ノ姫君河越小太郎娘ヲハ爰ニ捨置テ閑ト云白拍子ハカリヲ具給ヒ吉野ノ奥ヘ籠給フ衣^レ捨タル女房達袖ヲ片敷松ノ本ニタフレ臥ナキカナシミ給ヘハ見ル人哀ミ奉テ都ヘソ送ケル吉野法師共關東ヘノ聞ヘノタメニトテ追出奉ヘキ由聞ケレハ□ニ出給北國ニカ、リ奥ノ秀衡ヲ憑テ衣^レ落ケリ(巻十二)

(ロ)桜の吉野

①此櫻町ノ中納言ト申ハ心透^{トイ}給ヘル人ニテ町ニ櫻ヲ殖並ヘ

常ハ吉野。山ヲ戀ツ、花ノ裏ニ屋ヲ立テ住給ケレハクル年ノ春

毎ニ見ル人櫻町トソ申ケル(巻一)

⑩吉野。泊瀬ノ春ノ花籠田山ノ邊ノ秋ノ紅葉ハカシコニ行テ見サレトモ哥人カ知ル(巻十)

外に ⑤「吉野。山ノ奥ノ奥マテモ憂世ノ外ノ櫻ヲモ求ムヘキニ」
(巻八)

いのだろうか。

右の問題を解くための資料として、延慶本、源平盛衰記、長門本の

(1)(2)を引くことにしよう。

(1) 攝政殿ハ都ヘ歸ラセ給ヒテ西林寺ト云所ニ渡ラセ給ヒテソレ

ヨリ知足院ヘソ入ラセ給ヒケル人^⑤是ヲ不知攝政殿ハ吉野ノ奥ヘ

トソ申アヒタリケル——延慶本

校異(「給ヒケル」まで)

①同意ダガ、校合デキナイ(盛) 攝政殿は都へはか

へらせ給はて(長) ②寺へいら(盛) ③「たりけ

る」アリ(盛) ④か(盛) ⑤ナシ(盛) ⑥うつ

ら(盛) ⑦「給」ノミ(盛)

(2)(イ)延慶本

法皇ハ仙洞ヲ出テ見サセ給ワス主上ハ鳳闕ヲ去テ西國ヘトテ

行幸成リヌ關白殿ハ吉野ノ奥ニコモラセ給ヌトキコユ院宮々

原ハ八幡賀茂嵯峨大原北山東山ナムトノ片ホトリニ付テ逃隠

給ヘリ

(ロ)源平盛衰記(参考として、南都本を校異で示す。)

京都にハ院はよへよりうせ給ぬ主上は惡徒にひかれて西國ヘ

御幸^⑤ 攝政殿ハよし野のおくとかやきこゆ其外女院宮々もよ

のさはきにおそれましましてさか廣隆賀茂八幡邊に付て^⑩に

けかくれ申させ給ぬ——源平盛衰記

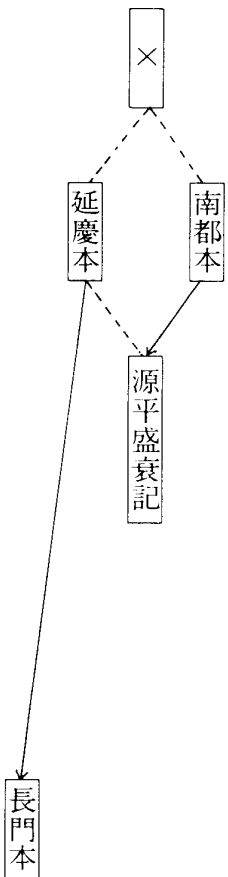
校異 ①夜ル ②渡ラセ給ワス ③内 ④なし ⑤行幸

- ⑥「成ヌ」あり ⑦モ ⑧⑨なし ⑩八幡賀茂 ⑪
ナントヘ ⑫「皆々」あり ⑬なし

(ハ)長門本

該当部を欠く

(2)の(イ)(ロ)にもとより大きな違いがあるわけではない。しかし、その表現を南都本と比較すると、(ロ)は添削(増減)部を除けば、極めてよく似ているとしなければならない(猶お、③⑦⑪は源平盛衰記と延慶本が、②⑤⑥⑧⑨⑩⑬は南都本と延慶本が、それぞれ一致している)。源平盛衰記の「攝政落留」関係の記事は、やはり、南都本とかなりの関わりがあると考えられる。それにしても、南都本、源平盛衰記・延慶本は、大きな違いはないというところで一つのつながりがあつた(長門本は「攝政落留」関係の記事が少いのが特徴である。これを延慶本との関係で、旧延慶本の姿なのか、延慶本からの省略なのかとみることにについて確定的なことは言えないが、(2)のように(「攝政落留給事」の春日明神の御告も類すると見ることはできる)延慶本と源平盛衰記で位置の異なる部分が、脱落する傾向があることは指摘できそうである。その関係を図示すれば、左のようになろうか。



南都本『平家物語』における吉野

橋口晋作

筆者は「攝政殿落留給事」に関して、南都本の記事に次のような注目をしたことがあった。^(注)

さらに南都本では攝政が「都ニテハ猶惡カルヘシトテ高則ヲ知ヘニテ吉野ノ奥ヘソ籠ラセ給ヒケル」とされる点が注目される。

延慶本、長門本、源平盛衰記は次のとおりである。

是を知らずして、攝政殿は吉野の奥へとぞ申あひける^{②③④⑤}

——長門本

校異 ①「人」アリ(延・盛) ②ナシ(延) ③ナシ(盛)

④ナシ(盛) ⑤「たり」アリ(延)

長門本等の「吉野の奥へ」に対応しているところが重要である。勿論、これは事実ではなからう。しかし、「吉野の奥」が「憂世ノ外」とみなされうるとすれば、一つの話もうまれるのである。

本稿は、これを承けて、(繰り返しになることもあるが)南都本における吉野という角度でまとめてみたものである。

(注) 拙稿「攝政殿落留給事」をめぐって——『侍』の物語など——(鹿児島

島県立短期大学紀要 第二七号)

南都本『平家物語』における吉野

問題の発端は、南都本では攝政が吉野の奥へ避難したことになっているのか、否か、ということであった。そこで、まず、南都本の攝政の「落留」以後の動静についての記事を再検討することから始めたい。「落留」以後の該当記事は次のとおりである。

(1) 都ニテハ猶惡カルヘシトテ高則ヲ知ヘニテ吉野ノ奥ヘソ籠ラセ給ヒケル

(2) サル程ニ京都ニハ夜ルヨリ渡ラセ給ワス内ハ西國へ行幸成ヌ攝政殿モ吉野ノ奥トカヤ聞ユ女院宮宮モ嵯峨ウツマサ八幡賀茂ナントヘ皆々逃隠レサセ給ヌ

(1)(2)の言い回しの違いが注目される。(1)は「ケル」という、無責任ともいえる助動詞でまとめられているが、「高則ヲ知ヘニテ」等の文派から、吉野の奥へ避難したと理解される。これに対して、(2)は院・内・女院宮々が「渡ラセ給ワヌ」「行幸成ヌ」「逃隠レサセ給ヌ」のように編著者(又は、語り手)の生の報道というかたちで示されている中で、この攝政だけが「トカヤ聞ユ」と風聞を伝えたかたちになっている。(2)における、この表現の違いは、変化をつけたとみる場合でも、少くとも、攝政の吉野行きを暈す働きをしていると思われるのであるが、書き分けたのだとみれば、攝政は吉野の奥にいないかはいかはつきりしない、というよりも、吉野の奥にいないといった気分で受け取られるかと思うのである。

このような、(1)(2)にみられる表現のずれ、これをどう考えればよ